

## 学校におけるカウンセリングに関する研究

### —スクールカウンセラーの役割に対する提言—

有 馬 比呂志

#### 問 題

様々な問題を抱えた児童・生徒そして学生が教育の現場に溢れている。そして「不登校」や「いじめ」をはじめとする学校を中心にして語られる諸現象は、新聞や雑誌、テレビなどのマスメディアの中でも語られ、深刻な社会的問題として扱われるようになってきた。また、そのような動きは、従来見られない複雑な様相と広がり呈している感がある。このような教育社会問題を、いかにして解決するか。あるいは完全な問題解決には至らなくとも、どのような方策・方略を採ればよりよい教育の方向性を見い出せたり、問題を未然に防ぐことができるかを教育関係者は問われている。教育の方法や教員のあり方、さらには教育の組織構造は既存のままでよいのか。もしそうでないならば、どのように改善していくことが望ましいのであろうか。学校現場や社会からの要望、そして何よりも、教育を受ける当事者である児童・生徒らの訴えに対して、教育学や教育・臨床心理学の研究者は、もっと耳を傾け、それに対して答えていく必要があるのではないだろうか。

その解決の一つの道として提示されたのが「学校カウンセリング」であろう。この「学校カウンセリング」の提唱は、学校という教育環境の中で、カウンセリングを教育活動の一つと見なし、カウンセリング自体に教育の重要な意味を与え、学校で学ぶ人たちの心身の発達を促すねらいがあると筆者は考えている。「学校カウンセリング」には、(1)教育相談室や教育相談センターで行われるカウンセリング、(2)校務分掌で担当となった教育相談者が行うカウンセリング、(3)学級担任や教科担任が行うカウンセリングの3つの使われ方がある(長尾, 1991)。(1)ではカウンセリングの場所が限定され、そこで行われるものだけが「学校カウンセリング」であるとするもので、この場合は学校外の施設(センター)も含めてはいるが、カウンセリングを担当する人についていえば、かなり限定され臨床心理などの専門家があたる可能性が高い場合である。(2)では(3)に比べカウンセリング担当者の範囲が狭められるが、(1)に比べると専門家が入らない可能性も出て来ることが考えられる。さらに(3)では担当者の範囲が広がるだけに、広く教育に携わるものがカウンセリングを行う必要のあることを感じさせるものである。本論では主に(2)と(3)の学校におけるカウンセリングを中心に論を進めることにする。

さて、この学校におけるカウンセリングを誰が担当するかについてであるが、最近「学校心理学」なる名称が日本教育心理学会で真剣に論議され、大学等で心理学を専攻してきた学生が教員になる場合に、教員免許状にこの名称の記載を可能にしようとする動きが出てきている。このことは、教

科教育を専攻してきた教員であるか心理学を専攻してきた教員であるかをよりの確に表す免許状にしようというねらいが示されている。それと同時に、近い将来において、心理的な問題に対して心理学を専攻した教師が中心的な役割を担い、よりよい対処ができるようにという学会の願いが表れているといえよう。しかしながら、実際の日本の学校においては、カウンセリングを専任のカウンセラーが担当しているところは全国でも100数校であり極めて少ない。国もカウンセラー常設校の必要性を感じ来年度から検討している学校は500校を越えるとみられてはいる。しかしながら、その数は全体的には十分な数には程遠い。新聞（1996年2月22日付、読売新聞）によると、昨年の秋から、文部省が導入したスクールカウンセラー制度にしても、担当者となる臨床心理士の絶対数が足りず、島根県では県内に16人、鳥取県では十数人の臨床心理士しかいないいうに、心理士が病院などの本業があるために対応に困っている実情であるという。また、佐賀、大分、三重県などでも同様で近隣の県から心理士の派遣を検討しているというのがこの制度の現状である。つまり、このスクールカウンセラー制度も、まだ十分な機能を果たすまでにはなっておらず、依然として多くの学校で担任教師や養護教諭の先生が実質的な意味でのカウンセリングを担っていかなければならないのが実態であろう。

では、学校カウンセリングに関わる人たちは自分自身やお互いをどう認識しているのだろうか、また、カウンセリングに関してはどのような意見を持っているのだろうか。伊藤(1994)は現場の教師247人と専門の臨床家（カウンセラー）68人のお互いに対するイメージと学校カウンセリングに関する意識の違いを探索的に検討している。その結果、伊藤は「カウンセラーは教師に対して、厳しく男性的・父親的で自信を持って積極的に介入する権威主義的なイメージを抱いている」そして、「教師はカウンセラー自身の自己イメージより“心が広く明るく自信もある”という強さや“まじめで静かで冷静”という人格の安定性という点でもまさっている」しかし「教師よりもカウンセラーの方が、女性性や受容性、柔らかさを強調した自己イメージを抱いており、ユーモアの理解という点でもより肯定的な評価を与えていること」を明らかにした。そして、その結果から「教師とカウンセラーが抱くお互いのイメージの間には懸隔があり、それが相互の連携を困難にしている」と考察している。さらに、伊藤は学校カウンセリングに関して教師とカウンセラーそれぞれの認識の違いを指摘する。具体的には、「専門家を校内に設置するのがよい」という意見には教師、カウンセラーともほぼ同じ6割を越える支持率であったが、「学外の専門機関に任せるのがよい」を選択したものは教師が約1割でカウンセラーが約3割という支持率で大きな差があった。さらに「教師が兼任するのがよい」という意見に対しては教師群では16%の支持率であったが、カウンセラー群では3%という低い支持率であった。このような結果を総括して、伊藤は学校現場におけるカウンセリングが、「教師とカウンセラーという役割の違いから来る矛盾をはらんだ問題となっている」と指摘している。すなわち、学校におけるカウンセリングが様々な複雑な問題を内包していることが、関係者の認識や意見の違いからうかがえるのである。

こうした現状から、学校カウンセリングのより良い方向性を見い出すために、本研究では現場の養護教諭からの声をもととして、スクールカウンセラーのあり方について探索的に検討することを目的とする。養護教諭を本研究の調査対象とした理由は、彼らが実質的なカウンセリングをスクールカウンセラー制度の実施以前から行っていたと考えられること。また養護教諭の指導的側面が教師よりも比較的少なく、学校では保健室という比較的独立した環境の中で子どもたちの声を聞くことができるため、校内の教育相談に関する率直で意義のある意見を持っていることが予想されたからである。

## 方 法

**被調査者** 広島市内の養護教諭26名（小学校16名，中学校6名，高校1名，大学1名）を対象に調査を行った。

**調査時期** 1995年11月から12月にかけて調査を行った。

**調査内容** 4つの質問項目から成る調査用紙（B5版）に回答を求めるものであった。質問1から3については、学校のカウンセリングについて「はい」か「いいえ」のいずれかにチェックをする形で答えてもらい、質問4については自由記述とした。

質問1. カウンセリングは「専門家を校内に設置するのがよい」

（はい，いいえ）

質問2. カウンセリングは「学校の専門機関に任せるのがよい」

（はい，いいえ）

質問3. カウンセリングは「教師が兼任するのがよい」

（はい，いいえ）

質問4. 学校カウンセリングに関する意見

（自由記述）

**調査方法** 実験協力者（幼稚園養護教諭，元小学校養護教諭）が調査用紙を研修時に手渡し，回収は各養護教諭に次の研修会に持参してもらった。研修会に参加の先生に関しては，郵送かFAXで電送してもらった。このため，回答時間の制限はなかった。

## 結 果

小学校の養護教諭と、中学校・高校の養護教諭の2群について、3つの質問の回答に差があるかどうかを、「はい」の回答に1点、「いいえ」には0点と得点化をした後、群×質問の2要因分散分析で統計的に検討した。その結果、群および質問についてのそれぞれの主効果には有意差はなく ( $F=0.053$ ,  $df=1/72$ , ns.;  $F=0.426$ ,  $df=2/72$ , ns.), また群×質問の交互作用にも有意差がみられなかった ( $F=0.080$ ,  $df=2/72$ , ns.). これらの結果より、小学校の養護教諭と中学校・

高校の養護教諭の先生のデータを併せて以下の分析をすることとした。まず、学校のカウンセリングについて調査した質問1に対する結果を、伊藤(1994)の教師とカウンセラーについての結果とともに図示したのがFigure 1である。ここではカウンセリングの専門家を校内に設置することに対する意見を尋ねるものであったがFigure 1を見ると、教師、カウンセラー、養護教諭のいずれにおいても、6割以上の人賛成の意見を持っていることが分かる。カイ2乗検定によって、教師、カウンセラー、養護教諭の3群の比較をした結果、有意な差は見られなかった ( $\chi^2=0.558$ ,  $df=2$ , ns.). この結果はこの質問1においては、養護教諭が教師やカウンセラーと同じ意見を持つことが示されている。質問2の結果から、学校カウンセリングを学外の専門家に任せるのがよいとする人の割合を伊藤(1994)の結果と併せてFigure 2に示した。カイ2乗検定により、教師、カウンセラー、養護教諭について比較した。その結果全体としては有意な差が見られた ( $\chi^2=21.725$ ,  $df=2$ ,  $p<0.001$ ). しかしながら、カウンセラーと養護教諭についてのみ比較し

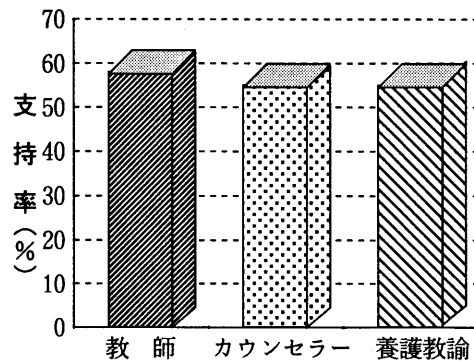


Figure 1 専門家の校内設置

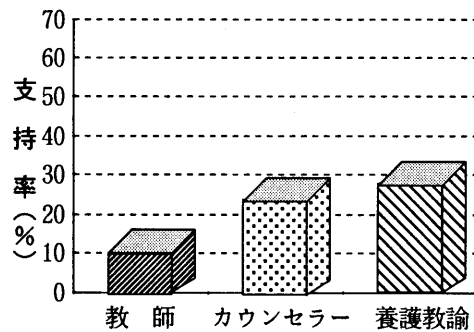


Figure 2 校外専門家への委任

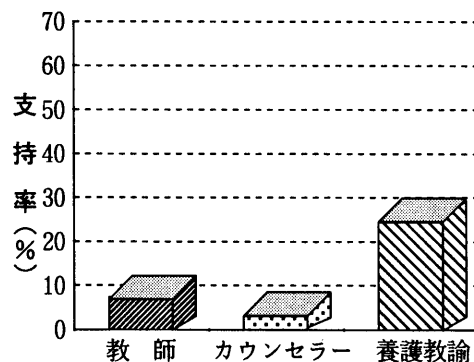


Figure 3 教師のカウンセラー兼任

たところ、有意な差は見られなかった ( $x=0.985$ ,  $df=1$ , ns.)。これらの結果から、養護教諭がカウンセラーと同等の意見を持っているが、教師とは異質の意見を持つことが分かる。

質問3の結果より学校カウンセリングは教師が兼任するのがよいとする者の割合を質問1, 2と同様に教師とカウンセラーの結果と併せてFigure 3に示した。質問1, 2と同様の統計的検定の結果、3群全体の比較においては有意差があった ( $x=33.905$ ,  $df=2$ ,  $P<0.001$ )。そこで、教師とカウンセラー、カウンセラーと養護教諭それぞれについて比較した結果、どちらについても有意な差のあることが分かった (教師とカウンセラー  $x=9.647$ ,  $df=1$ ,  $P<0.01$ ; カウンセラーと養護教諭  $x=9.019$ ,  $df=1$ ,  $P<0.01$ )。これらの結果から、教師とカウンセラー養護教諭がそれぞれ程度の違いをこの質問3に関しては、持っていることを示していることが分かる。

最後に、質問4に対しての養護教諭の意見を4つの型に分類して、原文の形であげてみる。なお、4つに大別するために、質問1, 3の回答を主として分類した。ただし、質問2についても考慮に入れた方がよいと考えられる意見については、文の最後の( )の中に賛成は2Y, 反対は2Nと記した。

1. 専門家を校内に設置には「賛成」、教師の兼任については「賛成」と回答したものを専門家援助・教師主導型、2. 専門家を校内に設置には「賛成」、教師の兼任については「反対」を学内専門家主導型、3. 専門家を校内に設置には「反対」、教師の兼任については「賛成」を教師主導型、4. 専門家を校内に設置には「反対」、教師の兼任についても「反対」を学外専門家主導型とした。

#### 1 専門家援助・教師主導型

- ・ただ授業時間数の問題がありますので検討はいるのですが、どこかで学校とつながっていないと困ると思います。ただ、現時点ですぐに相談できる専門家が、そばにいて下さる方が私にとってとはとても助かります。(専門家にかけてもうまいかないケースが多いので現場の相談にに応じていただく方がよいのではと思っています)
- ・専門家を校内におく事は重要な事だが一般に教師もカウンセリングの知識を持つ事が必要だと思う。(2N)
- ・(質問) 2, 3についてはどちらとも言えないのではないかと思います。(2Y)
- ・学校はその生徒に対して個々に何ができるのか、又養護教諭は何をすればよいか適切なのか研修していくこと。

#### 2-1 学内専門家主導型

- ・できれば、専門のカウンセラーを各校1名配置してほしい。養護教諭1名では、行事に追われることが多く、ゆっくりと話を聞くゆとりがありません。(2N)
- ・とても難しい問題だと思います。一言で「はい、いいえ」を返答できないのが正直なところです。現実として、学校の中の保健室(養教)が、いろいろな問題をかかえて、パンク寸前の状態になっています。子どもの考え、行動が、とても不可思議な傾向にあることを、毎日の勤務

の中で、痛感しています。このまま、放置していいものなのか…?! 必要性は、すごく感じるのですが、具体的にどのような形で、つくられていくべきなのか、これからの大きな課題だと思います。(2N)

- 週に一度、月に二度でもいいですから、教師のために来てもらえたらいいです。
- 一生懸命かかわってやりたいけど時間がない。その子をサポートしていくスタッフが必要であろう。
- 質問3についてはどちらとも言えないと思います。いろいろな立場の人がいる方がいいと思います。

## 2-2 学内外専門家主導型

- 専門的知識の人がカウンセリングにあたると良い、また、教師でないのも、校内でのこと等話しやすいと思う。(2Y)
- 教師の兼任は、職務の量的に無理。専任が原則。教師への研修も定期的に公的に実施してほしい。(何年に1回は、研修することなど)(2Y)
- カウンセリングを学外か教師が兼任かでまよいましたが、現在の中学校の状況では教師に時間的ゆとりがなかなかもないので学外をえらびました。いずれにしても教師同士の連携をスムーズにしながら生徒の成長を望まなければならないと思います。

## 3 教師主導型

- カウンセリングは専門的知識を要するもので、少しくらい勉強したくらいでは、実際にクライアントと対応するのはむずかしいと思います。ただし、カウンセリングを学んでいるのといないのでは、現場での対応は全く違います。現場で養教や教師がカウンセリングマインド的な対応ができることは重要だと思いますが、場合(ケース)によっては、又、きちんとしたカウンセリングは専門機関にまかせた方がいいと思います。(2N)
- 学校の教職員がカウンセリングの研修をすべき。また、時間的にも配慮すべき。
- 学校でカウンセリングをして、それについて相談を受けるところ(スーパーバイザー的な人)。

## 4 学外専門家主導型

- 専門家の先生に相談したいと思っても、なかなか現場では時間がとれないのではないのでしょうか?

## 考 察

本研究は養護教諭の意見を中心にして学校のカウンセリングへのよりよい方向性を探索的に検討することを目的として行われた。結果において重要な点は、養護教諭が様々な方法の可能性を考慮にいれ、またいずれの意見に関してもその他の関係者に比べて強い希望や要望を持っていることが示唆されたことである。具体的には「専門家を校内に設定すること」に関しては教師、カウンセラーと同じく7割近い養護教諭が賛成している。また、「学外専門機関に委任すること」に関しては教師約3倍にあたる38.5%の養護教諭が賛成していた。ここではカウンセラーの支持率と統計的有意差はなかったが、最も高い支持率であった。さらに、「教師のカウンセラー兼任」に対しては養護教諭が最も高い賛成（支持）率を示し、教師の支持率2倍以上の養護教諭の支持（34.7%）があり、養護教諭の3人に1人は「教師の兼任」に対して賛成の意見を持っていることが明らかになった。これらの結果を踏まえ、考察をする。

**校内の専門家の設置** 学校内に臨床心理士などのカウンセリングの専門家を置くことに対しては、養護教諭の多くが賛成していた。このことは学校で生じている問題が児童・生徒の心の問題が関係し、それらが深刻であり、また複雑化している現状を養護教諭も教師同様に感じていることを示すものである。さらに、学内の専門家を主にする考えを持った養護教諭の意見から、「教師のため」「いろいろなスタッフ」という言葉が見られる。すなわち、単にその専門家に任せっきりという考えではなく、彼らの助言やスーパーバイズを教師や養護教諭が受けられること、そして、学校に専門家がいてことによって、子どもの声を受け止めるスタッフが今まで以上に多くなり、校内のカウンセリングの体制づくりがより柔軟で充実したものになるという期待が示されていると思われる。

**校外の専門家への委任** 教師の3倍以上の支持率で約4割の養護教諭が、学校外にある病院の精神科や教育相談センター、心理クリニック、児童相談所等の専門機関に委任することを認めていた。この結果は養護教諭が、カウンセリングの対象となる問題を校内だけで対処することの限界を、教師以上に感じていることを示したものであろう。問題に専門的な知識のないまま対応することの難しさや恐ろしさを臨床家と同様に養護教諭が感じていることが示唆される。換言すれば、養護教諭は教師以上に問題に直面しやすく、また、それらの問題の専門性を認識することを余儀なくされている環境に在ることなのかもしれない。いずれにしても、校内にいる先生の一人である養護教諭が一般の教師以上に、校外の専門家への委任を支持していることは興味深い。それは、前述したように、養護教諭が教師の問題解決能力が低いという認識を持つことに起因するのではなく、より多くの人の知識や力をあわせて、子どもたちの心理的な問題に対応していこうとする養護教諭の態度が現れた結果であると考えたほうがよいであろう。それは次に述べる、教師のカウンセリング業務の兼任に対する支持が、明らかにカウンセラーのそれと異なっていたという結果からも示唆される。カウンセラーにはこの「教師の兼任」に賛成する者が数パーセントしかいなかったという伊

藤（1994）の結果からも分かるように、学外の専門家に委任するということは、教師だけでカウンセリングをするのではなく、教師ではない人（臨床家）がカウンセリングをすることの重要性をカウンセラーはより感じている。養護教諭は、こうした考えをカウンセラー同様に持っている一方で、教師のカウンセリングへの取り組みの必要性も感じていることが考えられる。

**教師の学校カウンセリングの兼任** 養護教諭が教師以上に教師のカウンセリングの兼任に賛成をしていた。しかし半数以上の人は、回答の難しさを示した結果でもあった。これは校内において教師がカウンセリング（や教育相談）をしていくことの困難さを同時に示している。ただし、「教師の兼任」に反対という回答をした人も、質問4の結果を見ても分かるようにその判断に迷っていることが示されている。また、それらの人の多くが教師の時間的ゆとりのなさを理由にあげている。これらの結果から、養護教諭の多くが本質的には教師の学校カウンセリングを肯定しているように推察される。つまり、養護教諭が教師や専門家といったいろいろな人たちによって、どのケースに対しても最善の処置を可能にしようとする姿勢や、学校カウンセリングに対して柔軟な考え・態度を持っていることを表していると考えられる。一般教師の兼任に対する態度が養護教諭に比べて消極的・否定的であったことの原因は、物理的・時間的な制約にあるのではなかろうか。もちろん適性や能力的な問題もあるであろうが、それも研修や学習機会の問題と切り離せず、結果として時間的なゆとりのなさに帰属されるのではないだろうか。もちろん、研修や学習の機会を求めているのは教師ばかりではなく、養護教諭も同様であろう。

**学校カウンセリングにおける専門家と教師に望むこと** 質問1～3の回答のパターンから、養護教諭の学校カウンセリングに関する意見を4つの型に分類した。(1)専門家も必要であり教師の兼任も認める専門家援助・教師指導型、(2)教師の兼任は認めないが学内に専門家の設置を支持する学内専門家主導型、(3)学内外の専門家よりも教師の兼任を支持する教師指導型、(4)数は少ないが、学内の専門家を置かず、教師の兼任も支持しないで学外の専門家に委任する学外専門家主導型の4つに分類された。この分類毎に自由に意見を述べてもらった質問4への回答を見たところ、(1)、(3)の教師主導型は教師自身の成長が必要と考えており、(2)、(4)の専門家型は専門家が教師自身のために必要であるということと、いろいろなスタッフによるカウンセリングを可能とするためという考え方が示された結果であった。先生には言えない悩みを受容するにはその先生以外の人間が当たらねばならないであろうし、教師の悩みを解消することもひいては子どもたちに良い影響となって還元されるからである。4つの型に共通して見られた意見は「時間的ゆとりのなさ」である。それは、教師、専門家、そして比較的ゆとりがあるように認識されている養護教諭にも同様の意見があることが本研究の結果からうかがえる。こうした時間的制約によって教師がカウンセリング知識を得ることや、児童・生徒と話すことが困難な状況になっていると思われる。教師か専門家かいずれかが主たるカウンセリング業務を受け持つにしても、時間的なゆとりが絶対に必要なことは確かである。

次のようなある中学教師の意見がある。「自分が担任しているクラスの中に、個別的な対応を必

要としている子どもがいる。その子の問題を理解し、何らかの手立てを講じようとして、心理学の書物をひも解いてみて、いつも疑問に思うことがある。そこに書かれていることはどれも大事なことでと思う。学力や知能についての検査も性格検査もやってみたい。本人との面談や個別指導も、親との面談も必要だと思う。自分が毎日学校に行って授業をしなくてもよいのなら、本に書かれたことも試みてみたいと思うが、残念ながら、今の自分にはそれは不可能である。本の著者たちは、現場の教師が毎日学校の中でどんなふうに過ごしているのか知っているのだろうか。われわれ現場の者が理解でき、忙しい毎日の中でも利用できる方法を教えて頂きたい」(松村, 1994)。

このような現場の声を踏まえて、教師は軽微な問題しか扱えず、深刻な問題は専門家に委せざるを得ないという意見に対して、松村は「確かに、結果的にはそのようになるのかもしれない。しかし、はじめからそうした‘分業体制’を敷くこと自体に問題がありはしないか。なぜなら、どのような種類の問題であれ学級の中の子どもたちの問題は、教師と子どもたちとの間で解決すべき側面を含んでいる。あるいは、学級の中で対応することが唯一の解決策となることもある。本来、そこで解決すべきことを学校外の専門家の手に委ねてしまったら、問題の真の解決は望めなくなってしまう」として、安易に学外の専門家に委ねることに警鐘を鳴らしている。

カウンセリングを誰かがすれば誰かはしないという二者択一的な考え方は学校においては難しい。ただし、現場の教師の現状を専門家や社会の人たちも十分に認識しておく必要がある。さらには、学校カウンセリングにおける教師の持つメリットと時間や専門性の不足からくるデメリットをその他のスタッフと共に補い合うことは今後の重要な課題ではないだろうか。そのためには、教師の持つ学校における役割の2側面、すなわち指導と相談(カウンセリング)を、理解し合える関係を専門家と学内の教師、養護教諭の間に育てることが望まれるのである。

**生徒指導と教育相談** 松村は教育心理学の知見が現場で通用しない原因の一つとして、教師の子どもへの対応と、臨床的場面での対応が違ふことをあげている。すなわち、教師の‘教え・諭す’態度と臨床家の‘待つこと・子どもの立場になって考えること’の違いである。しかしながら、学校においては指導的対応と相談的対応のどちらの対応の仕方も教師には求められるものではないだろうか。それゆえ、従来から教師の教育態度や教育観にこれらの2つの側面が影響を与えてきたと思われる。どちらの側面を重視するかによって、教師の子どもたちへのアプローチが変わってくる。例えば、有馬(1994)は「指導しなければならない」という強迫観念を持つ教師が多く、「これだけ指導したのだから」とか「何でも家庭訪問をしたのだから」といった、子どもへの指導をした行為(愛情)の引き換えとしての子どもの早急な変化を期待すべきでない、とし、「教える」より「育てる」教育が行われることを期待するとしている。ここでは、学校において不適応をおこしている子どもたちへの対応について述べてあるために、教育に全般における指導的側面よりも教育相談的側面をより重視した考えが示されている。もう一方の指導的立場からはどういった態度、アプローチが考えられるのだろうか。生徒指導と教育相談のそれぞれのアプローチの違いを比較する

ためまとめたものが、次に示すTableである。

Table 生徒指導と教育相談のアプローチの比較

	対象	担当者	方法	対処する問題	重点	時間
生徒指導	集団	教師のチームワーク	ルールを遵守させる	緊急な問題	社会的行動の習得	比較的短い
教育相談	個人	相談担当者(カウンセラー)	面談	深い問題	人間理解	長い

菅野(1993)を参考に筆者が作成

このTableからも分かるように、教育相談では生徒指導に比べて、より個人的な対応と多くの時間を費やすことが必要となる。そのために教育相談を重視する場合は、教師個人の資質も問われることになり、また時間的なゆとりを持たなければ相談アプローチをとることが困難になると考えられる。次に、生徒指導、教育相談のそれぞれの立場からの発想の対立を、菅野（1994）から上げてみる。

まず、「生徒指導側」からは“教育相談は生徒を甘やかしている。厳しさをいやがり、楽な道を求める今の生徒たちに迎合している”，“「自主性」「自発性」にまかせたら、まとまらない。わがまましたい放題の者も出てくる”，“「悪いことは悪い」という明確で厳しい指導でなければ、問題行動は減らない”などがあげられている。一方の「教育相談側」からは“生徒指導は「生徒＝指導される人」ととらえ、教師側の価値観を一方的に押し付けている”，“表面的現象だけを取り上げ、その奥にある生徒の内面を理解しようとしていない。表向きは教師にしたがっても、心の中では教師への反発や不信感を抱く生徒もでて来る”，“教師に注意されるからやらない、言わなければやらない、という受身な態度を強めるだけだ”

この例からも分かるように、それぞれの側面は教育において間違っている意見とは考えられない。「対立関係ではなく、相補う関係（菅野，1994）」と捉え、お互いの立場を認め合うべきではないだろうか。

**ネットワークとチームカウンセリング** 養護教諭は、保健室というある種のニュートラルな場にあって、一人孤独になりがちである。彼ら自身が相談相手を求めているといっても過言ではないだろう。もちろん教師も同様であろう。教師自身がカウンセリングを受けたいという要望も少なくない。そのためにも、専門家と常にコンタクトできることは大切である。今後は、専門機関とのネットワーク化をすすめるだけでなく、学校においては養護教諭も校内の一教職員として、他の教職員との連携を持つシステムが構築されることを期待したい。そのためには、教師の増員や研修時間の保障によって、教師や養護教諭が時間的ゆとりを持つだけでなく、保健室や校内の情報を子どもたち個人への守秘義務を履行したうえで開示し、沢山のスタッフによって子どもたちを支え合い、受容できるスクールカウンセリングが必要ではないだろうか。また、それが教師や養護教諭が専門家

のスーパーバイズを受けながら、また他の現場の先生からの情報を参考にしながら行っていくカウンセリング（このようなカウンセリングをここではチームカウンセリングと呼ぶ）もますます重要になってくると思われる。今後はチームカウンセリングを行うための具体的なシステム作りが課題になるであろう。

（本学初等教育学科講師・運営委員）

#### 引用文献

- 有馬比呂志 1994 適応行動がとれない子どもたちへ 藤土圭三（監修） 心理学からみた教育の世界 北大路書房
- 伊藤奈美子 1994 学校カウンセリングに関する探索的研究 ―教師とカウンセラーの役割兼務と連携をめぐって―  
教育心理学研究 42, 298-305.
- 菅野 純 1993 生徒指導 VS 教育相談 進路ジャーナル 398. 19-21.
- 菅野 純 1994 生徒指導とカウンセリングマインド 坂野雄二・宮川充司・大野木裕明（編）  
生徒指導と学校カウンセリング ナカニシヤ出版
- 長尾 博 1991 学校カウンセリング ナカニシヤ出版
- 松村茂治 1994 教室でいかす学級臨床心理学 福村出版